

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 川端康成文学研究  
—『雪国』の歴史的成立とその生成方法—

氏 名 李 明 喜

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、一九六八年の日本人初のノーベル文学賞受賞によって「美しい」「日本」を象徴する作家としてのレッテルを貼られ、それでのみ称される川端文学を、徹底した同時代的な視点を通して捉えなおすことで、川端文学の成立原理や方法、その本質を解明しようと試みたものである。

川端康成の文学は、ノーベル賞受賞以降、「日本の美」「日本の作家」の象徴として集約され定型化されてしまったことは否めない。同時に、ノーベル賞受賞の対象作品『雪国』は、その「美しい」「日本」を象徴する代表作として揺ぎ無い位置を占めている。しかし、『雪国』（初版・戦前版、創元社、昭和十二（一九三七）年）がすでに一九三七年に内務省警保局長の立ち上げた「文芸懇話会」の文学賞である「第三回文芸懇話会賞」を受賞し、それが当時の一部の文芸時評家の批判の対象ともなったこと、また作者がその批評家たちの声を取り入れて『雪国』に反映させていったこと、などは殆ど知られていない。そして、初版（戦前版）の『雪国』が刊行されているにも関わらず、作者は、その続きを雑誌に断続発表していき、このことが、二度目の『雪国』（改版・戦後版、創元社、昭和二十三年）の刊行につながり、現在一般に流通している「雪国」の形となったことなどは、殆ど注目されていない。

つまり、「日本の美」として集約され定型化される以前、川端文学周辺の同時代的状況(コンテキスト)と川端文学がいかに関わり歴史的に成り立っているのか、という問題は全く注目されず、またそれにより複雑な成立を遂げそこから派生する混乱が存在しているにも関わらず、「美しい」という単純な扱いしかされてない川端文学研究の現状には甚だしい偏りが見られる。

では、同時代の川端文学周辺の文脈のなかで、川端文学の成立の問題をどう捉えるべきなのか。『雪国』の生成に関することを明確にするためには、川端文学のテキストを同時代のコンテキストに即して考え、それらがどのように「交錯」しているのかを明らかにすることが必要である。なぜなら、「十五年にわたる執筆」過程を経た『雪国』は、その断続発表の都度、同時代の社会文化的なコンテキストと深く結び付いて生み出されていったからである。したがって、本研究では、約十四年間に亘る『雪国』の成立の問題を、川端文学における〈『雪国』の時代〉という一つの時代の問題として捉えて、川端文学とその同時代のコンテキストの「交錯」状態を明らかにし、川端文学の生成の原理やその方法を解明することを目標にしたい。こうした試みは、川端文学の本質を探る上で不可欠なことであると考えられる。

具体的に、川端康成における二つの『雪国』の問題を取り上げ、戦前版『雪国』と戦後版『雪国』がそれぞれどのような意味を持っているのかについての考察を行う。約十四年もの歳月をかけて書き継がれた『雪国』は、その成立期間において〈①最初の初出七編〉〈②初の統一初版・戦前版『雪国』〉〈③続きの初出四編〉〈④二度目の統一改版・戦後版『雪国』〉といった四段階にわたる本文形成へのプロセスが存在するため、その間、作者が戦前版から戦後版へ、「旧」から「新」の『雪国』へと物語の目指す方向を変えなければならなかった同時代的背景について考察することは重要である。戦前版『雪国』と戦後版『雪国』の間には、断続掲載を重ねて生じたテキストの大きな隔たりがあり、そこに至るまでの改稿や統合という本文形成の経緯をたどってそのもととなった〈作者の感覚〉と〈社会的な現実〉との関係を考えれば、川端文学と同時代コンテキストとの「交錯」状態が明らかになると同時に、川端文学の「時代」「歴史」「社会」に対する距離の取り方がうかがえる。

また、『雪国』が生成されていった約十四年間の成立期間を〈『雪国』の時代〉という一つの時代の問題として捉えることで、〈『雪国』の時代〉における川端文学の在り方についての考察を行う。この期間に川端文学がどう成り立ち得たのかを明らかにするためには〈『雪国』の時代〉に生み出された数々の作品を同時代のコンテキストと結びつけ、新たな視点で捉えなおすことが必要である。

それを踏まえれば、『雪国』本文形成における改変のプロセスには、川端の感覚の変化の様相がそのまま記され、そうして誕生した『雪国』には、長い「制作期間」を経た川端文学がたどり着こうとしたものが、そのまま映し出されていることが分かる。

〈伊豆〉から〈浅草〉へと「土地の移動」によって対照的な描き方をしているように、また『女性開眼』『名人』における〈美〉〈日本〉の両面的要素から浮き彫りになるように、川端文学が描いていたのは、〈美〉の一面的な様子ではなく、両面的・両極端な様子や今日的に変化した現実の様子（困難）までである。

そして、『雪国』成立をめぐる同時代の文脈との関わりにおいて、当時の「文芸時評」の批判的批評の聲が、初出を経て改稿・統合された『雪国』に何をもたらしたかに注目し、「文芸時評家」として「批評する／批評される」立場に置かれた川端の営みに焦点を当てることは重要である。さらに戦後版『雪国』が作り直されるプロセスにおいて、雑誌『人間』『鎌倉文庫』に携わっていた川端の営みについても注目しなければならない。それら活動を通して川端は、終戦直後の「文学者」の在り方とその「文学的時代性」を意識し、「文学者」である自分の過去の記録を再記録することになり、『雪国』を「今」の「歴史の流れ」に合わせ創作し続けたのである。

つまり、〈『雪国』の時代〉において川端文学は対照的・両面的な模様を改稿・推敲（追加と削除）により示し続けることによって、作者自身の「文学者」として生きることの厳しさや困難を提示しようとし、そうした営みそのものを「歴史の流れ」として位置付けていたのである。そのような川端文学の方法には、同時代的な意識がよく反映されていると見られ、言い換えれば、『雪国』は作者と同時代における周囲との共感とフィードバックによる歴史的な作用によって生れたものである。

そうした同時代的な理解の重要性は、川端文学の再検討の必要性和密接に関わると考えられる。そこに目を向ければ、単にこれまで言われてきたような「美しい」「日本」を象徴する抒情の文学としての意味に止まらない、約十四年もの歳月を経た「同時代の感覚が凝縮した文学」としての価値が見出せるのである。その成立過程そのものを理解することこそが川端文学の再検討につながるのである。